

# 南十字星

大阪大学外国語学部  
(旧大阪外国語大学)  
インドネシア語同窓会

2011年秋 第13号

発行 南十字星会

連絡先 大阪府池田市五月丘 2-5-113-402

電話 Fax 072-753-1693

Email rocky3@wombat.zaq.ne.jp

## わが心のインドネシア

林 喜久雄 ('60卒)



### 《第1章 ふたつの驚き》

2011年5月31日から6月3日まで、実に22年ぶりにインドネシアを訪問した。ジャカルタの交通渋滞、林立する高層ビル、絶好調の経済。これらは想定内だったが、2つの驚きに遭遇した。

まず外なる驚き。都会（ジャカルタ）や田舎（ソロ）を問わず、女性の服装のイスラム化だ。スカーフで頭髪を包み、踝までのスカートやざっくりした長ズボン着用。むき出しの手足にお目にかかることは殆どない。

次に内なる驚きは、筆者のインドネシア語が意外なほど錆びついていないことだった。ジャワ語訛りにも戸惑うことはなかったし、誰からも「インドネシア語お上手ですね」と言われなかったことが何よりも嬉しかった。「お上手ですね」と言われているうちは、まだほんものではないからだ。

筆者は1960年外大卒業と同時に日綿実業（後にニチメン現双日）に入社、1996年まで36年間同社に勤務した。この間駐在が5回、約17年間をインドネシアで過ごした。最初の駐在が1963年2月から65年12月、スカルノ政権末期、帰国の3ヶ月前にあの「9月30日事件」が起きている。2回目が1968年3月から1971年2月までの約3年間。奇しくもスハルト政権と同じ年のスタートであった。最後の5回目が1984年2月から1989年3月までの5年間だ。四捨五入的に言えば最初の8年間がスカルノのインドネシア、それ以外は全てスハルトのインドネシアとお付き合いということになる。

スハルト政権時代をどうみるか。「開発の父」という評価はほぼ固まったといえようが、ほかに「強権的」「経済最優先」「ファミリービジネス」「アセアンの盟主」「GDPの20倍増」など様々な見方が入り乱れている。

独断と偏見で1つだけ言わせてもらえば、世界最大のイスラム人口を抱える当時のインドネシアのあり方こそイスラム教国の模範であり、理想の姿だと欧米特にアメリカで高い評価を得た。国際的な地位は大いに上がったが、敬虔なイスラム教徒にとっては、辛く、ある意味では屈辱的な30年間ではなかったか。

スハルトの退陣と共に強権的な支配体制が緩み、ハビビ、ワヒドと親イスラム色の強い政権が誕生すると、鬱積していたイスラム教徒の不満はバリ島爆弾事件（2002年）、ジャカルタのホテル爆破事件（2003年）、オーストラリア大使館爆発事件（2004年）と、一気にジュマ・イスラミア等の過激派テロ活動へと連なって行くのだ。

さらに争議権解禁によるストの頻発とあいまって、ソニーをはじめ旭化成、カネボウ、京セラなど多くの日本企業の撤退が続出。5代目メガワティの時代には「自由アチェ運動」との和平交渉も決裂して、非常事態宣言が発せられることとなる。

2004年10月、初の直接選挙による6代目ユドヨノ大統領の誕生。一見頼りなさそうに見え、世論に叩かれながらも、ある種のツキもあり、見事な手腕で政治・経済・社会を軌道に乗せてゆく。ユドヨノが2期8年の任期を成功裡に全うすることはほぼ間違いないだろう。中興の祖といわれる時代が来るような予感もする。

ある種のツキとは敬虔なイスラム教徒と過激なイスラム教徒の離反である。敬虔なイスラム教徒の垂れ込みによって、過激なイスラム教徒の潜伏場所が次々と通報され、警察軍によって殲滅されていったのだ。

思うに女性の服装のイスラム化は本来バランス感覚に優れたインドネシア社会が経済最優先のスハルト路線を一部修正し、宗教と経済成長両方に配慮した、いわば妥協の産物のような気がするのだが、どうだろう。

さて、今回のインドネシア出張は鋳物工場を探すのが目的であった。三重県のある鋳物企業は15年前に思い切って、生産拠点を中国に移したのだが、「1人っ子政策」の結果、最近では求人広告をうっても1人の応募もないほど人手不足と労賃の高騰は深刻だ。生き残りをかけ新しい供給源として、インドネシアに白羽の矢を立てたのだ。ジョグジャ・ソロを中心とする中部ジャワには鋏、鎌、鋤等の農器具、砂糖工場用の機械等の製作、修理を行う中小の鋳物工場が古くはオランダ時代から多数存在し、今でもその数200とも300ともいわれている。

訪問したソロのある中堅鋳物企業とは帰国後もメールを通じて価格交渉の最中だが、英語でのやり取りがこみいってくると相手側はインドネシア語で本音を言ってくるのが面白い。微妙な表現や本音は英語では今ひとつぴたり来ないようだ。

は紡績（綿花一糸）、織布（糸一布）、仕上（布の漂白、染色、捺染一生地）、縫製（生地一最終製品＝服）と川上から川下まで、全てのプラントを経験した。

忘れられない客先がGKBI（Gabungan Koperasi Batik Indonesia＝インドネシア・バティック協同組合連合会）。ニチメンにとって、インドネシアに於ける最大の繊維機械の納入先であり、且つ合弁の提携先でもある。GKBIに限らず零細家内工業の強化という基本的な構想を政策化し、指導し、実施したのが「協同組合の父」モハマッド・ハッタ元副大統領であった。バティックを製造する協同組合がジャワ島各地に40もあり、組合員数約5000人、女工さんは約50万人ともいわれている。

1957年以降、組合の共同出資などで、中部ジャワMedariに紡・織・仕上一貫の2工場が次々建設された。これによってGKBIグループの白生地生産能力は飛躍的に拡大することになった。

1971年6月、GKBIと日本側大和紡績（ダイワボウ）、ニチメン、IFC（International Finance Corporation＝世界銀行の子会社）4社の出資による合弁会社、PT.Primatexco Indonesia（PRIMATEX）が設立された。目的は輸入白生地を全て国産化しようというものだ。当時アイディット率いるインドネシア共産党がまだ健在で、国有化というカントリーリスクを考慮して株主に国際機関を取り込むことにしたのだ。

翌1972年7月にはスハルト大統領やハッタ元副大統領の臨席を得て盛大な開所式が挙行された。

1970年代はまさに第1次繊維合弁進出ブームで14件の日系合弁が活動を開始した。その中であって、PRIMATEXは次の点で異彩を放つ。第1に合弁のパートナーを華商資本でなく、Pribumi資本と組んだこと。第2に合弁の製品を唯一コットン（綿）とし、第3に工場を西ジャワの都市部でなく、中部ジャワのド田舎（Batang）に建てたことだ。

Pribumi企業と綿100%の製品を地方で生産するという我々の選択の正否は、その後の歴史の中に見出すことができる。

1990年10月ミシン800台の縫製工場、1991年10月染色＋捺染（プリント）工場、1992年10月ニット糸専用の紡績工場、さらに1999年3月キャンバス等産業資材用織物工場とこの3社を基幹株主とする合弁事業4件が、次々と操業を開始したのだ。



## 《第2章 プロジェクトと合弁》

筆者はニチメン入社から卒業まで一貫してプラント

本部からのジャカルタ駐在であった。

いろんなプラント案件を手掛けた。冷蔵－冷凍－製氷のいわゆるコールドチェーンを北スマトラ、中部ジャワ、イリアンジャヤに建設するプラントも担当した。北スマトラでのプラント建設が完了して間もない、1975年1月6日、日本の大型タンカー祥和丸がマラッカ海峡で座礁し、原油が流出する事故があった。

水産庁の外郭団体でこのプラントを運営する事業会社の社長に会った。「これからという時に大変ですね」「まあ、大変といやあ大変だが…」と妙に機嫌が良い。よくよく聞くと事故の補償金で、10年での返済計画だった設備費が一挙にタダになったということらしい。もう時効だから、明かしても差し支えないだろう。

5回目の駐在時に担当したのが **Proyek Kertas Kraft Aceh** であった。セメント袋用のクラフト紙製造工場をアチェに建設することになった。総工費約700億円。筆者が手掛けた最大のプロジェクトである。相手側は工業省、日本側は日立造船とニチメンだ。1986年の操業開始からもう25年、早いものだ。繊維のプラントで

1971年のPRIMATEXの設立から40年、ダイワボウもGKBIもこれ以外の相手とは組んでいない。

「よくもまあ飽きもせず」愚直に、不器用に、そして誠実に…。



捺染工場の定礎式

### 《第3章 一気通貫》

1996年2月、筆者は定年前にニチメンを卒業して、ダイワボウ情報システム(以下DIS)に転職した。DISはダイワボウが開発した織布工場の生産管理システムを販売するため1982年4月に設立された会社である。資本金2千万円、役員、社員合わせて10名。初年度の売上は約4億円、2千万円の赤字であった。

翌年からは扱い商品をパソコンなど情報機器へと大きく販売方針を転換する。

当時パソコンはNEC、富士通、アップルなど内外各メーカーがほぼ3ヶ月ごとに新機種を発表するという生鮮食品並みの大変な時代。

一方、紡績会社は半年分ぐらいの原綿を在庫するのが当たり前で、この感覚をパソコン業界にも持ち込み、陳腐化のリスクも恐れず「在庫販売」を始めたのだ。これが馬鹿あたりにあたった。

同業他社では受注から納品まで1~2週間かかるところを、DISは5時までに注文すると翌日配送を可能にしたのである。在庫販売を始めた2年度からほぼ倍々ゲームで売上を伸ばし、筆者が入社した14年後の1996年には1900億円に達していた。現時点(2011年)では売上約4000億円、取扱うパソコンは年間約150万台、日本で販売されるパソコンの1割強がDIS経由で流通しており、業界トップの地位に登りつめたのである。

1991年株式の店頭登録、1997年には東阪両証券取引所2部に。筆者が勤務した時期は東証・大証第1部へと一気に駆け上がったDISの第2成長期に相当する。忙しく、充実して、楽しく、そしてスリルとサスペンスに満ちた5年間であった。

2001年役員定年を迎え、これで終わりかと思っていた矢先、DISの子会社で7店舗を有する小売り専門の「パソコンの館」の社長を拝命した。その後もまたDIS時代以上に波乱万丈の5年間であった。2002年、沼津に本社を置く中堅小売で17店舗を持つ会社との合併を果たした。「合併基本契約書」も「合弁基本契約書」と内容的には殆ど変わらない。合併交渉ではインドネシアでの一連の合弁設立体験が大いに役立った。

そして2004年、人事総務、財務経理、営業企画の管理職各1名と筆者を含むド素人の上場準備チームを統

括して、この新会社の株式をジャスダック証券取引所に上場することができたのだ。

ニチメン卒業後、ダイワボウグループの関連会社に約15年勤めたことになる。この間DISで平取、「パソコンの館」で社長、合併新会社では会長、常勤監査役、常務を歴任した。残るは専務だけか、まあ年齢からも無理かなと思っていた。

ところが、顧問を2年間勤めていたある会社から役員就任の要請を受けた。「肩書きは」と聞かれ、間髪をいれず「専務でお願いします」。これで平取から会長まで役員職全てを体験するという夢の一気通貫が完成したのである。

### 《終章 わが心のインドネシア》

振り返れば、高校時代に大学進学について親父に相談したのが、インドネシアとの関わりをもつ第1歩であった。「インドネシア語をやれ」。躊躇なく言われた。太平洋戦争当時、親父は軍属としてインドネシアに駐在、大のインドネシア好きになって帰国したのだ。

今回の訪問で改めて感じたのは、第2、第3の人生の活躍の場としてインドネシアに回帰され、嬉々として働いておられるOB達の多いことである。

終戦時の残留日本将兵は3000人とも4000人ともいわれる。国や上官の命令が機能なくなり、しかも不利な戦いを承知の上で、彼らを独立軍に馳せ参じさせたものは何だったのだろうか? 太平洋戦争の終末期、他の地域でこれと似た事象は見当たらない。インドネシア特有の現象であろう。

定年を迎えても尚インドネシアに活躍の場を持ち続けている多くの人々の心情と一脈通ずるような気がしてならない。簡単にいえば「離れがたい、去りがたい」のだ、きっと。

一見インドネシアとかかわりのない最近の15年間、筆者の心の中にも常にインドネシアへの思いが息づいていたような気がする。

わが心のインドネシア…。政治、経済、社会いずれの分野でもアジアで、いや世界で最も安定した国として着実な成長軌道に乗ったこの国に、心からなる拍手と声援を送り続けたい。





## キャンパス便り

大阪大学 世界言語研究センター  
講師 菅原 由美  
(外国語学部インドネシア語専攻担当教員)

平成23年度の新入生たちが全員そろって



### 平成23年度新入生 入学

4月6日に23年度入学式が執り行われ、インドネシア語専攻にも13人の新入生が入学しました。13人中12人が女性で、男性はたった1人という構成ですが、皆仲よく豊中キャンパスで、大学生生活をスタートさせました。同じ学科の先輩たちは箕面キャンパスなので、なかなか他学年と交流をとるのが難しいようです。でも、徐々に機会も増えることと思います。

この夏は10人ほどが松野先生のコーディネートでボゴールでのホームステイに参加の予定だと聞きました。1年生の夏からもインドネシアに向かう熱意に驚かされました。どんな体験をして、秋学期にキャンパスに戻ってくるか楽しみです。

### サフィトリ先生

昨年度1年間教鞭を執っていただいたシンペン先生が帰国され、4月から再びサフィトリ先生が箕面キャンパスに戻っていらっしゃいました。1年ぶりの再会に学生たちは非常に喜び、先生の研究室には学生たちがひっきりなしにやってきて、先生とおしゃべりをしていました。先生は授業で、プレゼンテーションなど、学生たちにもっとインドネシア語を積極的に使う訓練をさせています。

先生の出す課題に、共同研究室で頭を抱えている学生たちをよく見かけます。インドネシア語でインドネシアや日本の事情を説明することは、学生たちにはまだまだ難しいかもしれませんが、果敢に挑戦している学生もいます。

サフィトリ先生には、これから授業だけでなく、e-Learningの制作も手伝っていただくことになっています。

### 夏祭り

7月9日土曜日。猛暑の中、箕面キャンパスで学生待望の夏祭りが開催されました。今年は、2年生と4年生が別々に参加しました。2年生は南国風アイスクリームの販売、4年生はサテ・アヤム（焼き鳥）の販売を行いました。

2年生はドラゴンフルーツ（ブア・ナガ）のアイスなど、日本では珍しいアイスを販売していましたが、こうしたテント企画に参加



なソースをかけて食べてもらってました。テントの脇に立て掛けていたデヴィ夫人をモデルにして(?) 描いた看板が、かわいらしかったです。



するのが初めてだからでしょうか、なかなか準備に苦戦していました。

4年生はわざわざバリから材料を揃えて、サテにいろいろ





## 共同研究室活動

### ① 昼休みのインドネシア語会話会

現在、箕面キャンパスには4人のインドネシア人留学生が大学院生（及び研究生）として日本語の研究をしています。その4人の留学生に昼休み、曜日別に、インドネシア語共同研究室に来てもらい、学生たちと昼ごはんを食べながら、インドネシア語でおしゃべりをする機会を設けました。火曜日はElisaさんとLiliさん、水曜日はPikaさん、木曜日がTeguhさんの担当です。様々な学年の学生が研究室で留学生との会話を楽しんでいます。課題を手伝ってもらっている学生もいます。お互い同世代の人がどのようなことを考えているのか知るよい機会になれば、と思います。ちなみに、教員もたまに参加させてもらっています。



大きな鍋を研究室に持ち込みました。豊中から1年生も参加。けっこう時間もかかりましたが、何とかできあがり、研究室でご飯にオポル・アヤムをかけて

会食パーティー。ちょっと大味でも、学生たちはおいしそうに食べていました。



### ② インドネシア料理

共同研究室で6月20日に、4年生がサフィトリ先生と留学生に手伝ってもらって「インドネシア料理を作る会」を開催しました。メニューはオポル・アヤム（鶏肉のココナツ煮）、テンペ・ムンドアン（テンペの天ぷら）、ピサン・ゴレン（バナナ揚げ）、それにサンバル（唐辛子ソース）。

約30食分と多いため、寮で使う



インドネシア料理は、味のベースになるバワン・メラやニンニクなどを磨り潰すところから始まります。村で何か催しがある際、料理の準備は女性たちの共同作業になります。ニンニクの皮をみんなで1つひとつ剥く姿が、それとダブって見えました。次は2年生が企画するらしいです。

## 自己紹介

昨年10月に、天理大学より大阪大学世界言語研究センターに異動してきました。専門はインドネシア近代史。特にオランダ植民地時代19～20世紀のイスラームの展開に関心があります。オランダのライデン大学に半年、インドネシアではジャカルタとプカロンガンに約2年

滞在して調査を行い、東京外国語大学で、19世紀半ばに中部ジャワで展開したイスラーム運動についての博士論文を書きました。博士論文でオランダ語史料だけでなく、ジャワ語（アラビア文字）の写本を史料として用いた縁で、東京外国語大学のポスドク研究員として、インドネシアの写本資料の整備・保全活動に着手することになり、アチェからマカッサルまで飛び回りました。特に、スマトラでは、アチェ、ミナンカバウ地域、パレンバンで写本のカタログ作成とデジタル化事業を行い、日本の公文書館との協力で現

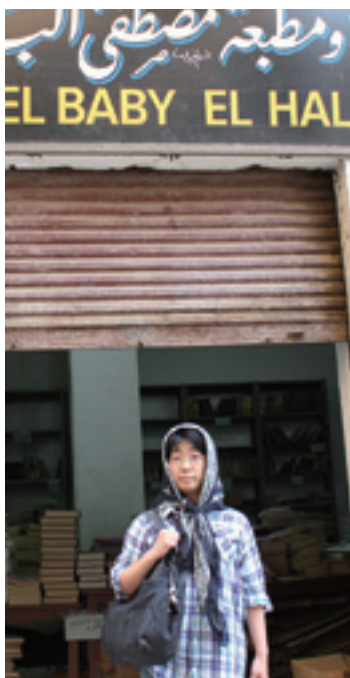
地の研究者・博物館職員等の写本修復研修のコー



ディネートもしています（主に地震後のアチェとパダン）。

インドネシア史研究はオランダ語史料が中心です。現地語写本は現在、史料として用いられることが極めて少なく、むしろ文学として位置づけられることが多いです。写本、すなわち現地語（マレー語、ジャワ語などの地方母語）資料をどのようにして史料として活用することができるかということ、現地の研究者とともに明らかにしていくことが今の私の課題です。

7月半ばに1週間ほど、カイロにジャウィ（アラビア文字マレー語）出版物の調査に出かけました。カイロには3000人ほどのインドネシア人学生がおり、彼らにインドネシア・イスラーム史の講義をしてきました。（写真はその時のもの）皆様、これからどうぞよろしくお願い致します。



カイロの書店で



## インドネシア暮らし

坂口 広之 (’88 卒)

大阪外大卒業後、蝶理(株)に入社。繊維原料貿易部門に在籍してジャカルタ駐在の聲がかかることを心待ちにしていました。でも、1991年に決まった最初の赴任地はパキスタンの商都カラチでした。会社人事の不条理を感じながらも赴いた土漠の地では、結果的に初の海外生活・刺激的な異国文化を楽しむ貴重な経験となりました。念願が叶ったのは1996年。晴れて喧騒の町ジャカルタでの駐在員生活が始まりました。

仕事以外の余暇には出来るだけ機会を見つけ、辺境地も含む国内のあちこちを旅行してまわるのが、当初の目標でした。しかし、思い通りにはいかないものです。折しも1997年の通貨危機と翌年のスハルト長期政権の崩壊から数年間にわたるインドネシアの騒乱などで見合わせた旅行もあり、結局、2001年にジャカルタ生活を終えるまでに行ったのはジャワ・バリ・ロンボクの有名観光地のみでした。

その後、インドネシアでのさらなる長期滞在も視野に入れ、当時取引先であったバンドンの繊維会社に転職を決

意し、2001年バンドンに居を移しました。

出張で頻繁に来ていたバンドンですが、本格的に住むのはこの時が初めて。バンドンは本当に何もない田舎だと以前は思っていました。実際住んでみると、標高700~800mのこの地はかなり涼しく通年クーラー要らずの生活です。交通渋滞もジャカルタと比べると随分まし。日本料理店が少ない、バンドン空港発着の便数に不満があるなどを除けば、住むにはベストな場所です。そして今年でインドネシア生活16年目を迎えています。週末は好きな植物を買って庭に植えたり、ペットのリクガメたちを散歩させたり。素朴なバンドンライフを楽しんでいます。



新天地でのスタートは公私とも順調でしたが、目標にしていた国内旅行の方は一向に進みません。しかし、やがて転機は訪れ、2005年にジャカルターバンドン間の高速道路が全面開通。そして後の「秘境の会(またの名はコテカ会)」と呼ばれる旅グループにつながった“パプアへの旅”に参加したのがきっかけになったのです。2008年暮れから、ようやく本格的に国内旅行を実現させ、2011年8月時点で全33州のうち18州の地を踏みました。あとの15州はこれから3~4年かけてまわれればと思っています。

これまでに訪れた中で、特に興味深かったところをご紹介します。

### 1) パプア州(ジャヤプラ - センタニ湖 - ワメナ: 2008年12月)

一番インパクトが強かったのはワメナで、今も股間にコテカを装着しただけの裸の人を見ることが出来ます(写真④=ダニ族の人たち)。しかし、西洋文明の産品が年々流入すると共に、多くの人(特に若者)が伝統的な生活から徐々に近代的なものへとシフトしているようです。パプアは最近再び治安面での問題が起きていると聞きます。パプア州を再訪する際は是非、ワメナの南、木彫り細工で有名なアスマットに行きたいのですが…。

### 2) 北マルク州(トルナテ島 - テイドレ島 - ハルマヘラ島北部: 2010年8月)

マルク諸島はかつて香料諸島と呼ばれたことでも有名。現在でも丁子やナツメグはこの主要産品のひとつで、トルナテでは道ばたに敷いた敷物の上で実を乾燥させている光景があちらこちらで見られます。北ハルマヘラのマリフットでは、日本軍の座礁船「へいわ丸」も見ることが出来ます。

ハルマヘラ島の旧日本軍座礁船の艦上で妻と





### 3) 北スラウェシ州 (マナド - トンダノ湖 - ビトゥン : 2004年4月)

マナドは対岸にあるブナケン島がダイビングで有名ですが、私は潜らないのでもっぱら陸側を探索。夜、海岸沿いのレストランで食べたヤシガニとウチワエビがとても美味しかったこと、ビトゥンで見た手のひらサイズの世界最小猿であるタルシウスが可愛かったことが印象的でした。2011年6月にマナドに近いソプタン山とロコン山が相次いで噴火しました。しばらくは様子を見た方が良さそうです。

### 4) 東カリマンタン州 (バリックパパン - マハカム川流域 : 2009年5月)



テンガロンから宿泊出来る個室付きハウスボートに乗り、夜寝ている間にマハカム川を遡航。日中は川沿いの

町を散策したり、小さなボートに乗り換え支流に入って、さらに奥地にあるダヤク族の村々を巡ったり (写真=川の上流の村で村長さんと)。ダヤク族の長屋風伝統家屋・ラミンは長大で見応えがあります。

この時は3泊4日の旅だったので、ムラック周辺までしか行けませんでした。旅程が1週間ほど取れたら、もっと上流部にも行ってみたいところです。

### 5) 中カリマンタン州 (パンカランプン - タンジュン・プティン : 2010年4月)

タンジュン・プティン国立公園にあるキャンプ・リーキーでは、保護されたオランウータンを自然に戻すための活動が行われており、女優ジュリア・ロバーツも1997年頃に訪れたことで有名。自然の中を自由に徘徊するオランウータン (写真・筆者と)、テナガザル、テングザルとも出会えました。



### 6) 西カリマンタン州 (ポンティアナック - シンカワン - マンドール : 2011年6月)

立派な赤道の碑がある赤道直下の町ポンティアナック。春分の日もしくは秋分の日に現地に立つと南中時間に太陽が真上から照りつけ、円柱の筒などの影がなくなる現象が見られます。マンドールは戦

時中にポンティアナック事件が起きた場所。日本人として一度は訪れて、大戦の歴史的意味などをじっくり考えてみる機会にしたいものです。

### 7) リアウ州～西スマトラ州 (プカンバル - ブキティンギ - パダン : 2011年2月)

このルートの旅で一番興味深かったのは、世界でも珍しい母系社会のシステムを現在も受け継いでいるミナンカバウ族の地ブキティンギでした。水牛の角を模した屋根を持つルマ・ガダンの最も有名なものは、パガルユン王国の王宮であるイスタノ・バサですが、ブキティンギからパダンにかけて、ルマ・ガダン型の建物はあちらこちらで見ることが出来ます。パダンに行かれる際は、特産のクリピック・バラド (唐辛子がたっぷりついたポテトチップス) もお買い忘れなく。

### 8) ランプン州 (バンダル・ランペン - ワイ・カンバス : 2010年2月)

スマトラ島最南端のこの州には、空路以外にバンテン州メラク港から約2時間半フェリーに乗り、ランペン州側のバカフニ港へ入る方法もあり、この時は海路を利用しました。ワイ・カンバス国立公園は捕獲された野生の象をリハビリ・トレーニングする施設があり、広い平原のいる60頭余りの象の姿はなかなか圧巻でした。



### 9) バンテン州 (バドゥイ : 2009年4月、ウジュン・クーロン : 2009年8月)

バドゥイの山岳部には黒バドゥイ (写真=出会った老人) と身分の高い白バドゥイの住む村々が点在。彼らは異文化・文明を拒絶し、伝統的なアダットに従って生きています。

一方のウジュン・クーロン国立公園はジャワ島最西部にあり、パンタイ・チャリタから海路で入ります。広大な国立公園内には絶滅寸前のジャワサイがいますが、棲息数が少なく現地のレンジャーでも目撃することはほとんどないようです。ウジュン・クーロンの海は、到底同じジャワのものとは思えない透明度の高さでした。

☆

以上、ほんの寸評となりましたが、皆様がインドネシア国内旅行を計画される際、目的地選びの一助にでもなれば幸いです。

寄稿

Apa &amp; siapa

挑戦 転身 大阪狭山市議

## 義によって立つ

小原 一浩 ('63 卒)

市民オンブズマンの代表になっていた4年前に、市会議員候補者を招いて公開討論会を開催したことがある。

「オンブズマンから立候補者を…」と、ある議員から暗に水を向けられたが、当時は全くその気がなかった。外からボランティア的に提案する方が良い。内部に入ったら「ミイラ取りがミイラになる」と考えていたのだが、今回はその思いを断ち切った「挑戦」であった。

討論会から4年が経過した。その間、市の財政は苦しく、緊縮財政の下での議員の活躍の場は少ない。その故に議会は平穏、議員はサラリーマン化し、温和な仏様になっていた。その上、今回の統一地方選でも府会議員、市長、市議会議員も無投票になるとの噂が出ていた。仲間から「無投票はダメ。2月9日の説明会に行こう。そうすれば、のんびり議員に衝撃を与えられる。同行するから」と誘われた。地方分権が叫ばれている今、住みよいまちづくりのために議会が果たすべき責任は重い。日頃から何よりもまず、議会の活性化が必要であると感じていた。

地元からは4期目の現職、共産党員の10期目の挑戦、数年前から準備万端の新人候補者の3人が立候補予定者として名前が挙がっていた。まず、志のありそうな若者に当たったが、乗り気でない。自身の立候補は決心が付きかねていた。

躊躇した理由の1つに「選挙に立候補するなら、即離婚」という以前からの妻の“宣言”があった。妹たちは大反対を唱え、その夕方から妻が音信不通に。千葉の息子へ電話したが素っ気ない。一方、娘は妻の味方だ。堺の義母は「何故反対するのやろう」と、この騒動の中でのただ1人の理解者であった。そして、3日後、姉夫婦に付き添われて妻が帰宅し、同意を得た。この妻の同意、仲間の積極的な後



6月19日に発足した後援会で



押し、4月10日から山の仲間と予約していた「クロアチア旅行」の急な日程変更などが無かったら、今回の立候補は無かった。これらが相合わさって、神の思し召しであった。とにかく選挙戦は、立候補前からハプニングの連続。選挙活動は最短、高齢者の初挑戦、地元の応援はなく、況や鞆（資金）においてをや、である。だが、議会改革への情熱は強く、義を見てせざるは勇なきなり。機を逸して後悔するより「ダメモト」で敢行した。

謳い文句は「熟年・壮年には元気を！ 若者には夢を！」であった。ぬるま湯に浸かっている自分たちが変わる必要があり、その象徴として「さやま維新の会」を名乗って「Change」を強調した。

4月17日(日)から23日(土)までの短い運動期間中、草の根的な選挙戦を展開(写真①は出陣式)。俄かに作った選対本部ゆえ、事前の票読みが全く出来なかったが、懸命に支援してくれた仲間から感謝を申し上げたい。不十分な選挙戦ながら人事を尽くし天命を待った。正直なところ、選挙を楽しみ、過去の人生には無かった心地よい緊張感を味わった。そして予想を覆す上位(6位)当選を果たした。先輩から、選挙をすれば人情や人の心がとてもよくわかると言われていたが、今回まさにそれを実感した次第である。

選挙運動用葉書で南十字星会の宮崎会長に推薦人になっていただき、告示日のポスター張り作業には外大のワンゲルOBの有志が駆けつけてくれた。「新人候補の最高齢当選は快挙である」と認定してくれるOBもいた。古希を超えた新人の当選は確かに珍しい。だが、昨年、高齢者でも元気な人が多く、60歳を超えた男性の平均余命は23年。持ち時間を有意義に、多少でも世の中の役に立てるならこれ程幸せなことではない。

今は「ボランティア的議員」として、建設的は々非々精神でもって「限りある身の力試さん」の心境である。

外大時の山の仲間も応援に





## 最後のチャンス

石丸 誠一 ('75 卒)

4年前、何も分らぬままに選挙戦に飛び込み、惨敗を喫した。しかし、「まだ何か出来る！力が残っているはず！」と信じ、最後のチャンスに賭けることになった今回の選挙である。63歳という年齢を考えると、もう後はない。

みんなの党の公認を得られたのは2010年11月中旬。公認が得られるのかどうかによって、出馬できるかできないかが決まる…結果を待つだけの日々はとても長く感じ、苛立つ日々だった。

公認を得、寒いなか選挙態勢に入った。実質約5カ月の選挙戦だ。

「1度は通った道」とはいえ、選挙区が(垂水区に)替わっており、やることは山のようにあった。意

気込みすぎず、1つひとつの課題を冷静に取り組んでいくことだと自分に言い聞かせて、こつこつと日々の目標をこなしていった。

実際に選挙活動を始めてみて驚いたのは「みんなの党」に対する期待の大きさだ。民主でもない、自民でもない、第3の選択肢。追い風の中にあると思えた。

そんな期待の声を聞くと、心底うれしく思えた。そして市政に対する意欲が湧いてくるのを感じたものだった。当選への思いがどんどん膨らみ、選挙活動も調子よく進んでいった。

しかし3月11日、東日本大震災が起こった。

追い込みをかけるべき時期なのに、皆一様に活動自粛になってしまった。タスキ・旗・マイクを使わず、名前・政策も積極的には出していけない。募金活動を主軸にし

た朝の挨拶のみとなっていく。

もちろん被災された方々のことを思うと当然ではあるが、4月10日に投票を控えた新人候補者としては、大変厳しい選挙戦となってしまった。

公示日(4月1日)以降、本選に入ると現職の強さをひしひしと感じる。それまで追い風だと信じていた空気が一変、活動自粛の影響や現職の組織の強さなど、やはりそう簡単には現職を蹴散らせるものではなかった。

体力的な疲れもあり、正直言うと、自信をなくした時期でもあった。

そんな時でも「やっぱり頑張らねば！」と思えたのは、市民の期待の声・家族や事務所の選挙員達の献身的な努力。本当に皆に支えられた選挙戦であった。

とうとう迎えた投票日。開票が始まるころからテレビにかじりついていて。夜11時近く、自分の顔写真とともに「当確」が出された時には、うれしいというより驚いた。自分のことである実感が湧かず、テレビでよく見る光景…のように感じた。「当選した！」のだが、「これで選挙は終わった」「良い結果になった」と、安堵の気持ちの方が大きかったようにも思う。

混迷し、漂流する現代の政治。明日がよく見えない。私への一票は究極の選択だったかも知れない。議員となって求められているのは、「政策の実行」だろう。今は政策実行へのSTEPを踏み出したばかり、目の回る忙しい毎日である。

最後に私は、専門知識を持った多くの人に、もっと政治に関わってほしいと思っている。それぞれの人の専門知識が政策につながるからだ。

明日への道を、政治が切り開いて行かねばならないと信じております。



党首の渡辺喜美氏と握手



寄稿

Apa &amp; siapa

## 留学で学んだこと

福島 亜里沙 (’10 卒)

大学時代には、留学やスピーチコンテストなど日本、インドネシアで先生方をはじめ多くの先輩方にお世話になりました。この場をお借りして、改めて厚くお礼申し上げます。インドネシアに留学中、ご活躍されている先輩方が「君もいつか絶対インドネシアに戻ってくるよ!」と口を揃えて言ってくださいましたことを、今でも鮮明に覚えております。

私は2010年に大学を卒業し、某自動車メーカーに就職いたしました。10ヶ月間の工場実習を経て、入社2年目となる今年の4月から海外営業四輪南米課に配属。ブラジルとの時差に悩まされながら、毎日夜遅くまで働いております。

ここでは主に学生時代の留学体験(2007年5月~2008年7月)について書かせていただきます。

留学当初3ヶ月間、インドネシア外務省主催の

芸術文化交流プログラムに参加しておりました。アジア、大洋州から集められた留学生50人はジョグジャカルタ、ソロ、バリ、バンドンの4ヶ所に分かれ、各地の文化を学び、最後のクロージングセレモニーに向けて踊りや音楽を毎日勉強しておりました。私はソロに配置されました。(写真①)。

ソロはどんな田舎かと思っていました。でも、マクドナルドや映画館、ショッピングモール、そして伝統的な市場、宮廷、古い匂いのするお店などが立ち並んでいます。穏やかで過ごしやすい町でした。

夜には風に乗ってガムラン演奏が聞こえてきます。涼しい夜に甘くて温かいジャワティーを飲みながら、荘厳でまったりしたガムランの生演奏を聴くのは、私の贅沢な楽しみでした。そのうち、おじいさん達のガムラン演奏に混ぜて



ソロのバティック工房で

頂くようになり、ガムラン音楽の若者離れが進み、後継者不足が危惧されていることも知りました。

その後1年間はダルマシスワ・プログラムに従ってボゴールの私立バクアン大学文学部で学びました。日本人はただ1人。そんな環境が私を強くしてくれたのかもしれませんが。ローカルバスやアンコット、電車など乗りこなしジャカルタに遊びに行くこともしばしば。地元になじんで、すっかり“インドネシア人化”しておりました。ソロの優雅な雰囲気とは違い、ボゴールは活気、熱気に溢れた町でした。舞踊や音楽も、大変ダイナミック。

私はスダの芸術家のお宅に通い、タリ・トペンという仮面を使った激しい舞踊を習い始めました。この踊りを通じて現地の結婚式や、イスラムの伝統的な儀式、ボゴール市のイベントなどで踊り子として呼ばれる機会も増え、多くの人々や文化と交流することができました(写真②=踊りの先生と)。

最後の2ヶ月間は、インドネシア外務省の Public Diplomacy Department (広報文化交流部) という部署にお願いし、秘書としてインターンをさせて頂きました。このときの経験は、現在の仕事にも少なからず役立っている気がします。

思い返せば、学生という特権を最大限に活かし色々なことを吸収していました。仕事で疲れ果てている現在、留学当時の活力、エネルギー、行動力を、我ながら羨ましいとさえ思っ

てしまいます。インドネシアで得た当時のチャレンジングな気持ちを忘れず、これからも色々な見聞を増やしていきたいです。





# サザンクロス懇話会

～第3回～

「災害後の復興支援と国際協力」



南十字星会主催の「第3回サザンクロス懇話会」が11年3月19日、恒例の会場となっている阪大中之島センターで開かれました。テーマは『災害後の復興支援と国際協力』。

スマトラ島沖で起きた大地震大津波(2004年12月)の大災害後、海外支援で多くの復興事業が展開され、そのひとつに震源に近いアチェ北部の9つの村でマングローブ植林による地域防災事業が行われました。日本赤十字社から現地に派遣された亀山恵理子さん(96年卒、奈良県立大学講師)から、当時の事業活動についてスライド映写をまじえ、話をうかがいました。

マングローブの緑地帯で防災というのはユニークですが、日赤はベトナムでも植林経験があったそうです。「2009年までの2年間で約120万本のマングローブが植えられ、事業終了時に86%の木が育ち“成功した事業”でした」。地元では「雇用を生んだ」「もっと生活支援を期待した…」「エビの養殖池再生に役立った」など、反応は生活とのからみで地域差があったということです。

ACEHの地名はアラブ、チャイナ、エロパ、ヒンディの各頭文字を取り“世界に向かって開かれているのだ”と地元の人たちが力説。また、アチェ市内には白っぽい記念ポール(写真⑥)が計30本立っていて、これらはそれぞれの場所を襲った大津波の高さを表しているといったエピソードも披露されました。

休憩を挟み、宮崎衛夫さん(65年卒、開発援助コンサルタント)が、世銀やアジア開発銀行の事例を踏まえ「途上国への開発援助」について関連講演しました。

懇話会を開催したのは、たまたま3・11東日本大震



災のすぐあとでした。そのため、時期的にとっても関心が強いテーマとなったようです。質疑応答では参加者たちからも活発な意見が出されました。

## 消息

## ひとこと (敬称略)

東郷芳温(44卒)=東京都千代田区  
内藤先生、イスマイル先生の時代でした。校舎は上八。シンガポール陥落の年、インドネシアブームで漫才のアチャコ・エンタツが「人はオラン、飯はナシ、菓子はクエ」とインドネシアの言葉をネタにしゃべっていました。

板坂勇夫(47卒)=東京都杉並区  
先般18年勤めた日本インドネシア協会から退職しました。1957年のプルダニア銀行勤務から54年間、一貫してインドネシアとかかわる仕事に携わって参りました。「やり遂げた」という満足感を覚えます。

原 勝利(50卒)=千葉県佐倉市  
家内を老々介護。孫が医科大生のため長生きを強いられている始末。86歳で尚人生を楽しんでいます。

大久保隆平(53卒)=埼玉県毛呂山町  
やっと年齢並みにというか、足腰の不自由に悩まされています。しかし、気持ちはまだまだ、頑張っています。

山口 寛(58卒)=大阪府枚方市  
継続は力なり。活力ある誌面づくりを応援しています。会員の貴重なる体験談を風化させぬためにも、引き続きご尽力をお願い致します。

河上宗弘(58卒)=大阪府茨木市  
6年間会長を務められた山口寛さん、有難うございました。新会長宮崎衛夫さん、ご健勝を祈念申し上げます。

粕谷俊樹(62卒)=滋賀県大津市  
バリ島ウブドで、在住の日本人が設立した児童図書館プロジェクト(<http://tunasmekar.cocolog-nifty.com>)に参画しています。ウブドに御出の節は是非覗いてみて下さい。

山下勝男(66卒)=さいたま市  
会報はOBのご活躍と消息を知る上で貴重な情報源となっています。

朝倉俊雄(67卒)=横浜市戸塚区  
ラオスのピエンチャンに来て2年半。来年(2012年)3月にはプロジェクトが終了し帰国する予定です。

佐伯 孝(72卒)=千葉県柏市  
約3年前に住友商事を退職。現在は実質、隠遁生活です。

大倉直己(85卒)=名古屋市長和区  
現在、シンガポールに駐在中。

北畠原平(98卒)=東京都新宿区  
10年11月、娘が生まれました。

本田知美(98卒)=東京都世田谷区  
育児休業を終え職場復帰。いつも走っている感じですが(保育園のお迎えに駅からダッシュ!!)、周囲の支えで何とか過ごしています。

中戸康司(03卒)=東京都江戸川区  
2011年7月から半年間、会社の語学留学制度でイギリスに。

◆おくやみ申し上げます◆  
大西嘉彰(36卒)=東大阪市 11年2月  
坂田安雄(43卒)=池田市 11年6月  
大内克彦(48卒)=豊中市 10年3月  
十倉太一(49卒)=川崎市 09年12月  
岡田 弘(56卒)=大阪市 10年12月